

## 「全鍍連」 2022年 3月号 理事長のよこがお

岐阜県メッキ工業組合 石垣 彰寛 (株丸石工業所 代表取締役)

「コロナ禍と小さな神社の小さな雅楽の話」



コロナウイルスが中国武漢で発生してから丸2年が経ちました。兎にも角にも、コロナ前ではすんなり予定通りに行われた行事が延期や中止になるなど、本当にコロナウイルスという厄介な病原微生物に翻弄された2年でした。「まさか生きている間にこんなことが起こるなんて」皆さんそう思われているのではないのでしょうか。

いつ終息するのか解からないコロナ禍、マスクが取れて普通通り生活に戻れるには早くて1年以上、変異株次第ではそれ以上かかるとの見解もあります。とは言えこれ以上社会生活の自粛状態が続くとすると色々な所に影響が出てきます。今までなにも問題なく出来ていた会議や集会は集まる事が出来ず中止になり、計画そのものが延期や取り止めになる事が多くなっています。

私の周りにも、長引くコロナ禍で生活面や身近な社会生活の変化が出てきました、私は今年度自治会長を仰せつかって居りますが昨年4月から今まで行事と言うものはすべて中止になっています。これで2年間これといった行事や活動をやらないまま終わろうとしています。

さて小さな神社の小さな雅楽の話ですが、総氏子数31軒と極小ですが市内の神社のなかでも雅楽を持っている所は少なく、歴史は古く大正時代より続いています。雅楽編成は太鼓、笙二管、箏二管、竜笛二管です。演奏する曲も五条楽をリピートしているだけですが現在、神道のお葬式に呼ばれていくこともあります。楽師の平均年齢56.6歳と高齢化が進みあとどれだけやれるか分からない私の様な人も何人かいる状態でしたので、今後雅楽はどうやって行くのか、どうやって継承して行くか話が出始めてきたところに、コロナ禍と言う大問題が押し寄せてきました。

2年間は飛沫拡散や集まりの自粛の為に、本番はもとより練習も全く楽器を鳴らす事が出来ないままです。祭礼は神事のみとなり雅楽、直会では中止、氏子の中には雅楽も直会も無くてもいいのではなどと言う意見も出始めています。本当に危機的状態なのです、しかしコロナごときに負ける訳には行きません、これまで戦禍による楽員の減少など幾多の困難を乗り越え伝承されてきた貴重な文化遺産の為に、後継者の育成や楽器の保全をやりながら後世に伝えるべく、私たち氏子に課せられた課題として取り組んでいかなければならないと思っています。

本当にコロナに翻弄された2年間でしたが、まだまだ感染拡大も予想される中一刻も早く終息に向かい普通の生活が戻ることを、「大変なコロナ禍〇年間だったね」と振り返れる時が来ることを願っています。惜しくもコロナによりご逝去された方のご冥福をお祈りすると共に、重症で入院されている方、後遺症と戦っておられる方々の一日も早い回復をお祈り申し上げます。